

星

国木田独步

青空文庫

都に程近き田舎に年わかき詩人住みけり。家は小高き丘の麓に
 ありて、その庭は家にふさわしからず広く清き流れ丘の木立ちよ
 り走り出でてこれを貫き過ぐ。木々は野生えのままに育ち、春は
 梅桜乱れ咲き、夏は緑陰深く繁りて小川の水も暗く、秋は紅葉の
 錦みごとなり。秋やや老いて風鳴りそむれば物さびしさ限りなく、
 冬に入りては木の葉落ち尽くして庭の面のみ見すかさるる、中に
 も松杉の類のみは緑に誇る。詩人は朝夕にこの庭を楽しみて暮ら
 しき。

ある年の冬の初め、この庭の主人は一人の老僕と、朝な朝な箒
 執りて落ち葉はき集め、これを流れ岸の七個所に積み、積みたる

ままに二十日あまり経^たちぬ。霜白く置きそむれば、小川の水の凍
るも遠からじと見えたり。かくて日曜日の夕暮れ、詩人外より帰
り来たりて、しばしが間庭の中をあなたと歩み、清き声に
て歌うは楽しき恋の歌ならめ。この詩人の身うちには年わかき血
温^{あた}かく環^{めぐ}りて、冬の夜寒^{よさむ}も物の数ならず、何事も楽しくかつ悲し
く、悲しくかつ楽し、自ら詩作り、自ら歌い、自ら泣きて楽しめ
り。

この夕は空高く晴れて星の光もひときわ鮮^{あざ}やかなればにや、夜^よ
に入りてもややしばらくは流れの潯^{ほとり}を^し追^{しょう}遙^{よう}してありしが、つ
いに老僕をよびて落ち葉つみたる一つへ火を移さしめておのれは
内に入りぬ。かくて人々深き眠りに入り夜ふけぬれど、この火の

みはよく燃えつ、炎は小川の水にうつり、煙はますぐに立ちのぼりて、杉の叢立^{むらだ}つあたりに青煙^{せいえん}一抹^{いちまつ}、霧のごとくに重し。

夜はいよいよふけ、大空と地と次第に相近づけり。星一つ一つ梢^{こずえ}に下り、梢の露一つ一つ空に帰らんとす。万籟^{ばんらい}寂^{せき}として声なく、ただ詩人が庭の煙のみいよいよ高くのぼれり。

天に年わかき男星^{おぼしめぼし}女星ありて、相隔つる遠けれど恋路^{こいじ}は千万里

も一里とて、このふたりいつしか深き愛の夢に入り、夜々の樂し

き時を地に下りて享^うけ、あるいは高峰^{たかみね}の岩角^{かど}に、あるいは大^{おお}

海原^{なばら}の波の上に、あるいは細^ほ溪川^{そたにかわ}の流れの潯^{ほとり}に、つきぬ睦^{むつご}

語^{こと}かたり明かし、東雲^{しのめ}の空に驚きては天に帰りぬ。

めぼし
女星は早くも詩人が庭より立ち上る煙を見つけ、今宵^{こよい}はこの

ほか寒く、天の河にも霜降りたれば、かの煙たつ庭に下りて、た
き火かきたてて語りてんというに、男星ほほえみつ、相抱きて
煙たどりて音もなく庭に下りぬ。女星の額の玉は紅の光を射、男
星のは水色の光を放てり。天津乙女は恋の香に酔いて力なく男星
の肩に依れり。かくて二人は一山の落ち葉燃え尽くるまで、つ
きぬ心を語りて黎明近くなりて西の空遠く帰りぬ。その次の夜
もまた詩人は積みし落ち葉の一つを燃かしむれば、男星女星もま
た空より下りて昨夜のごとく語りき。かくて土曜の夜まで、夜々
詩人の庭より煙たち、夜ふくれば水色の光と紅の光と相並びてこ
の庭に下れど、詩人は少しもこれを知ることなし。

七つの落ち葉の山、六つまで焼きて土曜日の夜はただ一つを余

うすくれない
淡紅色の

しぬ。この一つより立つ煙ほそぼそと天にのぼれば、
霞かすみにつつまれて乙女おとめの星先に立ち静かに庭に下れり。詩人が庭の

たき火も今夜をかぎりなれば残り惜しく二人は語り、さて帰るさ、

庭の主人あるじに一語の礼なくてあるべからずと、打ち連れて詩人の室しつ

に入れば、浮世のほかなる尊き顔の色のわかかわかしく、罪なき眠

りに入れる詩人が寝顔を二人はしばし見とれぬ。枕辺まくらべ近く取り

乱しあるは国々の詩集なり。その一つ開きしままに置かれ、西詩せいし

「わが心高原こうげんにあり」ちよう詩のところ出でてその中の

『いざさらば雪ゆきを戴いたく高峰たかね』

なる一句赤き線すじひかれぬ。乙女の星はこれを見て早くも露の涙う

かべ、年わかき君の心のけだかきことよと言ひ、さて何事か詩人

の耳に口寄せて私語ささやき、私語ささやきおわれれば恋人たち相顧みて打ちえ
みつ、詩人の優しき頬ほおにかわるがわる接吻くちづけして、安けく眠りた
まえと言いい言いい出いで去りたり。

あくれば日曜日の朝、詩人は寝ねぎめの床に昨夜の夢を想い起こ
しぬ。夢に天津乙女の額あまつおとめひたえに紅の星戴いたけるが現われて、言葉なく打
ち招くままに誘われて丘にのぼれば、乙女は寄りそいて私語ささやくよ
う、君は恋を望みたもうか、はた自由を願いたもうかと問うに、
自由の血は恋、恋の翼つばさは自由なれば、われその一を欠く事を願わ
ずと答う、乙女ほほえみつ、さればまず君に見するものありと遠
く西の空を指さし、よく眼定まなこめて見たまえと言いつてていずことも
なく消え失うせたり。詩人はこの夢を思い起こすや、跳はね起きて東

のめ

雲の空ようやく白きに、ひと独り家を出で丘に登りぬ。西の空うち
見やれば二つの小さき星、ひくく地にたれて薄き光を放てり、し
ばらくして東の空こんじき金色に染まり、かの星の光おのず自から消えて、地
平線の上に現われし連山の影まゆずみ黛のごとく峰々に戴く雪の色は夢よ
りも淡し、詩人が心は恍惚こうこつの境にと鎔け、その目には涙あふれぬ。
これ壮年の者ならでは知らぬ涙にて、この涙のむ者は地上にて望
むもかいたなき自由にあこがる。しかるに壮年の人よりこの涙を誘
うもののうちにても、天外にそびゆる高峰たかねの雪の淡々あわあわしく恋の
夢路おもかげをおもかげ梯に写したらんごときに若くものあらじ。

詩人は声はり上げて『わが心高原にあり』をうたい、『いざ去
らば雪をいただく高峰』の句に至りて、その声ひとときわ高く、そ

の目は遠く連山の方を見やりて恋うるがごとく、
肩に垂るる黒髪風にゆらぎ昇る旭に全身かがやけば、
かざして立てる彼が姿はさながら自由の化身とも見えにき。

（二十九年十一月作）

青空文庫情報

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年2月15日第1刷発行

1972（昭和47）年8月16日第37刷改版発行

2002（平成14）年4月5日第77刷発行

底本の親本：「武蔵野」民友社

1901（明治34）年3月

初出：「国民之友」

1896（明治29）年12月

入力：土屋隆

校正：蔣龍

2009年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

星
国木田独歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>